

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

フォールスタッフの立ち位置

狩 野 良 規*

あの人気者、イギリス文学史上の名物男、サー・ジョン・フォールスタッフ
が闊歩する芝居である。ビヤ樽のような腹を突き出し、酒は飲み放題、女は抱
きまくる、むろん顔や体型でもてるタイプにあらず、絵に描いたようなエロ爺^{じい}、
だが口説き上手、大ぼら吹き、嘘偽りの固まり、豪放磊落^{らいらく}、に見えて実は臆病
で弱虫、逃げ足速し、人を騙しても盗みをはたらいでも賄賂を受け取っても罪
の意識は皆無、「サー」を名乗りながら中世の騎士道精神を罵倒する名ばかり騎
士、無責任、お気楽、自分勝手、チャランポラン、しかして明朗快活、彼が登
場すると周囲がパッと明るくなる、愛嬌があつて憎めない、怒っていた奴もつ
いつい彼のことは許してしまう、次王たる皇太子ハルまで悪の道に誘い込む、
およそ浮世のしがらみなく、人生を本音で生きる、それはそれはみごとな自由
精神の持ち主、ラブレーの筆になるガルガンチュアやパンタグリュエル、セル
バンテスのドン・キホーテと並ぶ、そう、まさにルネサンス精神の権化！

僕は学生時代、年をとったら、こんな老人になりたいとあこがれたものだ¹⁾。

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

1) 僕は大学4年のころから体重が増えはじめ、学生結婚した時には、銀行員の嫁さん
のヒモならぬ“ツナ”と呼ばれた。自分がフォールスタッフほどの出っ腹だとは思
っていないかった(今でも思っていない)が、しかし結婚式では羽織袴の新郎はふつ
う、恰幅をよく見せるためにお腹にタオルを入れる、それをせず、式場の仲居さん
から「やっぱり自腹はいいわねえ～」と、惚れ惚れされた。ついでに新婚生活なら
ぬ“貧困生活”，亭主閑白ならぬ“亭主淡泊”と豪語(?)し、また僕は家で修論を書
き、家内は毎日出勤していたので、彼女のことは“家外”と呼んでいた。

で、タイトルは『ヘンリー四世』第1部・第2部、まじめな歴史劇²⁾である。この大酒飲みのスケベ親父、希代の無責任男を、舞台のどこにどういう風に立たせるべきか。

全2部作の第1部は、内乱に苦悩する王宮のヘンリー四世の姿から始まる。自分も前王リチャード二世に叛旗を翻し、クーデターによって王座に就いた点が弱みだ。封建諸侯たちとの不和を嘆く国王の長ゼリフ、「この作品は歴史劇だぞ〜」と宣言し、「おっ、今日の芝居はお堅そうだぜ」と観客に覚悟させる、重苦しくも政治的な開幕シーン。

と、場面が転換して1幕2場、ハルこと王子ヘンリーの部屋。そこで真昼間にフォールスタッフがゲースカ寝ている。ふつうは老いとともに、トイレが近くなり、また世事への憂いもあり、若い時ほど熟睡できなくなる。だがご老体は、豪快に爆睡している。それだけで羨ましい。皇太子に起こされ、さっそく悪態をつく。ハルと一緒に追いはぎをやりうという話になる。

ほどなく王子ひとりになると、彼の有名な独白、「俺はおまえたちの魂胆などちゃんと見抜いている、俺は太陽だ、今は怪しげな雲に覆われているが、しかるべき時が来て、その暗雲を取り除き、本来の輝きを見せれば、人々は意表を突かれ、かえって大喜びするだろう」。評判の悪いモノローグである。素の人間性をさらけ出すフォールスタッフに対して、腹に一物の王子ハル。将来は、『ヘンリー五世』では、アジンコート^{アジンコート}の戦いでフランス軍を撃破する英雄国王の若かりしころの放蕩物語、さて、その皇太子の内面は？

真夜中のギャズヒルの丘。フォールスタッフらが計画どおり商人を襲って大金を奪うが、その直後に変装したハルと彼の腹心ポインズが飛び出して彼らを脅し、ハッポコ騎士らは^{ほうほう}這々の体で逃げてゆく。舞台ではいくらでも滑稽に演出できようが、戯曲で読めば、いかにもあっけない一場である。

むしろ第1部の白眉とされる喜劇的場面はその後の2幕4場、ロンドンの下

2) シェイクスピアの歴史劇 (histories) に分類される作品はすべて、中世の国王の名前が冠されたイングランド史劇である。

町、イーストチープのいかがわしき猪首亭^{ボアーズヘッド・ターバン}でのやりとりである。フォールスタッフたちが空手で帰ってくる。さっそく愚痴だか自慢話だかが始まる。彼らを襲ってきた10人以上の悪党と2時間戦った、それがハルに煽られ、あっという間に話は相手が50人に膨れ上がり、殺した敵の数もどんどん増える。シェイクスピアの筆が乗って乗って、止まらなくなっているのがわかる。ハルもポインズも、さらには観客も皆、真相は先刻承知のうでで聞いているという仕掛けである。

フォールスタッフの大言壮語が頂点に達したところで、王子が、「俺たちがやった、おまえたちの相手は2人だけだった」と。さあ、どうする、フォールスタッフ？ 躊躇は一瞬だけ、彼は平然として、「おまえたちだってことは知っていた」と。ヘッヘッヘッ、「でも、お世継ぎを殺^やっちゃうわけにはいかないだろう、俺の本能が勇気を押しとどめたのだ」。お見事！ 見た目ではなく行動でもなく、こうした豊饒なることばのおかしさが、フォールスタッフの真の魅力である。

ボアーズヘッド酒場では、フォールスタッフとハルが国王の声色を真似る、これも有名な見せ場が続く。国王に扮したフォールスタッフがハルに、「おまえの悪仲間の中に、ひとりだけ徳高き老人がいる……彼以外は追放してもよい」と。国王役がハルに代わり、王子の悪友をボロクソに貶す。すると、デブ^{けな}の王子は、「フォールスタッフを追放なさるのは、全世界を追放するのも同然です」と。ハルは「わしは追放するぞ」と——たぶん多くの俳優は真顔でクールに語り、フォールスタッフの顔は一瞬憂いを帯びる、ってところであろう。

行状よろしからぬ、また内心の見えぬ王子ハルに対して、反乱軍の若大将ヘンリー・パーシーは情熱の固まり、あだ名は“熱い拍車^{ホットスパー} (Hotspur)”。ヘンリー四世も、熱血漢のホットスパーがわが子であってくれれば、と宣う始末。第1部の風雲児である。

芝居は、王宮や反乱軍の様子を伝える政治の世界とボアーズヘッドの庶民の世界が、交互に描かれる。歌舞伎でいえば、「時代物」と「世話物」が混在した作品。また、前者のセリフは韻文で、後者は散文で綴られている。

クライマックスは、国王軍と反乱軍が相まみえるシュルーズベリーの戦いである。さすがのハルも、いざ戦争となれば国王軍に馳せ参じ、あやうく討たれそうになった父王の命を救う。おゝ、改心したか、放蕩息子?! 激戦につぐ激戦。

そんな天下分け目の関ヶ原で、ひとり本音を吐くのが、フォールスタッフである。血塗られた戦場での名高きモノローグ(5幕1場)。名誉って何だ——「^{エアヘツ}空気だ」。そう、人はなぜ命を賭して戦うのか、名誉のためか、お国のためか、はたまた陛下のためか?! さらに人は、何に突き動かされて損な、ヤバい、危うい仕事を引き受けるのか。金や利害のためだけではあるまい、会社のため、組織のため、いや自らのプライドがためか、出世欲、自己顕示欲のなせる業? それとも^{ミツシヨン}宗教的倫理観、^{ベルーフ}天職の意識、^{ノブレス・オブリージュ}上流階級の義務感が突き動かすのか?! それらを^{原始的}に一言でまとめて“名誉”，その目に見えぬ理念を空気だ、と。しかり、しかり。フォールスタッフは命の危険を感じると、死んだふりをして、戦場に横たわる。やっぱり人間、命がいちばん大事だよなあ。

やがてハルとホットスパーの一騎討ちとなる。ちょいとしたアクション・シーン。王子が敵の、^{りんりん}勇気凛々の、自身より好感度の高い熱血児を倒す。そして、息を切らせながらふと横を見ると、贅肉の山が転がっている。おまえもあたら命を散らしたか。ハルは悲しげな顔で去ってゆく。

と、フォールスタッフがむっくりと起き上がり、ホットスパーの^{しかばね}屍を見下ろして、名ゼリフを吐く、「真の勇氣は慎重さなり³⁾」と。^{アーメン}御意。フォールスタッフは、こんな火の玉みたいな奴が生き返ったらたまらないと、グサリ、グサリ、何度もとどめを刺し、「よし、俺が討ち取ったことにしよう!」名誉と情熱の象徴たるホットスパーの亡骸^{かつ}を担いで、戦場をのっしのっしと歩きはじめたところで、ハルと出くわす。王子はもちろん、口あんぐり。

この作品、反戦劇か?! 派手な活劇シーンより、無頼漢の語る「人間の本音」が印象に残る幕切れではある。

3) “The better part of valour is discretion.” 文脈を越えて、僕の処世訓となっている。「君子、危うきに近寄らず」、「触らぬ神に祟りなし」、「見ざる、聞かざる、言わざる」、「クワバラ、クワバラ」。

第2部。われらがフォールスタッフはどこか元気がない。体調がよくないらしく、医者に小便を調べてもらう。痛風だとか。当たり前だ、あれだけ暴飲暴食の無茶苦茶な生活をしていれば、尿酸値が上がらないはずがない。道端で高等法院長に会い、お小言を頂戴するが、耳が聞こえないふりをする。さらに猪首亭の女将クイックリーに、全財産飲み食いされ、結婚の約束も不履行と訴えられるが、なんだかんだ言いくるめてしまう。第1部では支配階級の名誉の觀念を皮肉る機能を果たしていた騎士は、第2部の幕が開くと、陽気さが影をひそめ、悪賢さが目立つ爺さんに格下げされている。

2幕4場のボアーズヘッド酒場の場面も、あまり出来がよろしくない。第1部の同幕同場のルネサンス的な、祝祭的な気分がない。二番煎じか？ また、ハルとフォールスタッフが交わるのは、ほとんどこのシーンのみ。

『ヘンリー四世』には、最初から2部作の構想だったのか、それとも途中で2作に割ったのかという議論がある。そもそもヘンリー四世の治世、種本の年代記⁴⁾には大したネタがない。反乱の記述ばかりで、つまらない。そこでフォールスタッフなる喜劇的人物をシェイクスピアは創造したのだが、彼は一度興に乗ってくると、作品としてのバランスなどものは、肥満体をさらにさらに膨らませてしまう、およそ計画性のない作家。しかしそうすると、「こりゃ、1作品では収拾がつかない」、シェイクスピア沙翁が途中から2部作に変更したと、僕は推測している⁵⁾。

反乱軍の話もパツとしない。ホットスパーに相当する脇役がいない。彼は第1部の前半では情熱系の好漢、けれどもしだいに猪突猛進ぶりが気になりだし、冷静・冷徹な王子ハルを引き立たせ、終幕ではフォールスタッフがうそぶく「真

4) ラファエル・ホリンシュッド『イングランド、スコットランド、およびアイルランド歴史年代記』(Raphael Holinshed, *The Chronicles of England, Scotland and Ireland*, 1577年, 第2版1587年), その他。復刻版が普及しているので、大学の図書館あたりでご覧あれ。また, Geoffrey Bullough (ed.), *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, 8 vols., Routledge and Kegan Paul, 1957-75. は、シェイクスピアが参考にしただろう種本の箇所を抜粋して集めてくれた便利な本である。

5) 延々と議論が続いている、これからも続くであろう論題である。どの『ヘンリー四世』の翻訳本でも、あとがきや解題のページで必ず触れているから、各自ご参照あれ。

の勇氣は慎重さなり」の一句を決めゼリフたらしめる対立概念を体現する役割を担っていた。

戯曲では反乱軍もフォールスタッフも意気の上がない第2部の前半を、劇場の観客にどう飽きずに付き合わせるか、演出家の腕の見せどころといえよう。

沙翁もそれは十分に承知していた。そこで怪しげな脇役を増やした。“すぐ行かせる”女将クイックリーに加えて、フォールスタッフの新しい愛人として登場するのはドル，“お人形”。彼のアナーキーな子分ピストルは，“一物”^{いちもつ}って感じか。『ヘンリー五世』ではクイックリーと結婚して猪首亭の亭主に収まっている。さらに田舎判事のシャローは“浅はか”，サイレンスはこれも判事のくせに“しゃべれない”男で，しばしばどもりという設定で舞台に現れる。ちなみにフォールスタッフ (Falstaff) は，愚か (fool) で，不正 (foul) な男で，むろん太ちょ (fat) な奴とも読めようか。

2幕4場は，ボアーズヘッド酒場で飲み騒ぐフォールスタッフにも召集がかり，ドルとの短い別れの間が，ちょっと劇場をしんみりさせる。転換すると，深刻な空気が漂う王宮，3幕1場。病床の国王が政情不安を嘆きながら，眠れぬ夜を過ごしている。彼の長いモノローグの結びは，「幸福な民よ，眠れ！王冠を頂く^{こうべ}頭に安らぎは訪れない⁶⁾」。民衆の浮かれ騒ぎが吹っ飛ぶ，痛烈かつシリアスな詩行。ヘッヘッヘッ，歴史劇らしくなってきたじゃありませんか。

続く3幕2場は，これも名高きフォールスタッフの兵隊集めの一場。戦う気のない巨漢の隊長に協力するのは，前述したグロスターシャー⁷⁾のおいぼれ治安判事シャローである。昔から老いた名優が扮して，時にはフォールスタッフを食ってしまうほどの人気を博した。口から出まかせばかり，若いころの色と

6) “Then happy low, lie down! Uneasy lies the head that wears a crown.” タイミングといい，ゼリフの内容といい，為政者の苦悩を表現して，申し分のない名ゼリフである。

7) グロスターシャーはイングランド南西部，シェイクスピアの生まれたウォリックシャーの隣の州である。なだらかな丘が続く，いかにもイングランドの田舎といった地域。今はすっかり観光名所となったコッツウォルズのひなびた村々が点在する州といえば，おわかりいただけるだろう。

喧嘩の自慢話は、どうやら全部嘘のよう。その横にいるのが“沈黙の人”^{サイレンス}というのも笑える。彼らとともに兵を選ぶフォールスタッフは、袖の下を寄こした者は家に帰し、戦争にはおよそ役に立ちそうもない新兵ばかりを補充して、満足げに戦場へ向かう⁸⁾。

フォールスタッフの横には、もう王子ハルはいない。シェイクスピアは意識的に二人を引き離そうとしている。そして、ハルの代わりを務める素朴な田舎判事たちをカモろうとするフォールスタッフが、だんだんと狡猾な小人物に見える。

『ヘンリー四世』は日本人にとって、しょせんよそ様の国の歴史劇。日本で上演すると、ついついフォールスタッフという圧倒的な道化にスポットライトを当ててしまう。だが、シェイクスピアが第2部で必死に、人気の出過ぎた彼の株を下げようとしているその筆遣いを思うと、やはりこの芝居の中心は政治の世界にありそうなのである。また、イギリスの俳優は脇役まで皆、実にうまい。多彩な登場人物たちを演技力のある俳優たちが演じる、フォールスタッフがピタリとアンサンブルにはまっているロンドンやストラットフォードの舞台を見ると、あらためてフォールスタッフが主役の劇ではないと実感させられる。

話はストーリーに戻って、反乱軍の首謀者たちは、ハルの弟、ランカスター公ジョンの政治的駆け引きにより逮捕され、国王軍は戦火を交えることなく内乱を治める。しかし、ロンドンの王宮では国王ヘンリー四世がいよいよ衰弱し、シュルーズベリーの戦いの後ふたたび放蕩生活を送っていたハルと、そしてイ

8) 絶対王政という官僚制と常備軍を有することがその特徴と高校の世界史の教科書には書いてあるが、それはルイ14世のフランスを念頭に置いた一般モデルであって、エリザベス朝のイングランドは常備軍をもっていなかった。また、国王の目が行き届いたのはロンドンを中心とする限られた地域のみで、地方はその土地の名士を無給の名誉職たる治安判事 (magistrate) に任命し、治めさせていた。すなわち、エリザベス女王は「絶対」ということばの響きとはほど遠い脆弱な権力基盤のうえに立って、ようやく国家意識の芽生えはじめた島国を網渡りで統治していたわけである。さらに、徴兵制による国民軍はナポレオンの創始した制度なのを、ご存じか。それ以前は、いざ戦争となれば、隊長に指名された者が各自、兵隊集めをした。フォールスタッフが新兵をかき集める様子は、16世紀のイングランドの実態を伝える風景として、しばしば歴史書にまで引用される有名な場面である。

ングランドの行く末を案じている。

4幕5場。もはや虫の息の父親が眠る部屋にハルがやって来る。すでに事切れたと早合点した息子は、父王の枕元の王冠を持ち去る。だが、父はまだ生きていた。彼は目を覚ますと、王冠がないことに気づき、戻ってきた息子にありったけの罵声を浴びせる。「なぜあと半時間が待てぬのだ？」ハルは必死に反論する。息子の真情を知った国王は王子に諭す。自分は紆余曲折の末に王冠を手に入れたので苦労したが、おまえは違う、正統の継承者だ、しかし無事安寧もまた王位を狙う者を生む、外征に従わせよ……

シェイクスピアは現実政治をよく知っている。国王の皇太子に対する最後の戒めは、君主いかにあるべきかを語って、実に厳しい長ゼリフである。と同時に、ここには「父と子」という永遠の文学テーマが凝縮されている。しかも、二人はふつうの父子ではない。ハルは次の王位を運命づけられた人物である。おそらく最初は、グレート遊び歩いていたのだろう。だが、どこかでフォールスタッフたちと手を切らねばとも思案していたはずだ。評判の悪い独白もその表れであろう。そして、ずっとギクシャクしていた父と子は、最後の最後に王冠をめぐる本気でお互いをさらけ出すことによって、心が通じ合う。幸せではないか。父親と息子が心底わかり合えるなんて、実際にはめったに見かけない光景である⁹⁾。

ヘンリー四世崩御。以前にハルをたしなめて牢獄送りにしたことのある高等法院長が、新王の誕生で自分は左遷だと憂えている。意を決して自らの正しさを語る正義漢の法律家。するとヘンリー五世は、「もっともだ、今後ともよろしく頼むぞ、私の息子の同じ無礼を戒めるその日まで長生きしてくれ」。泣かせるセリフである。シェイクスピアという作家、歴史劇では現実政治の非情さ、理

9) 僕はつくづく無名の両親から生まれて、幸福だった。“親の七光”をもつ人間を羨ましいと思ったことはない。また、王宮の仕事(学科主任、教職員組合の委員長)を終えてしばらくした時に、たまたま『ヘンリー四世』の研究会があった。そこで僕は、「非情な王宮から自由なボアーズヘッドに戻ってまいりました。退職までも二度と政治の世界には首を突っ込みません」と宣言した。あゝ、いいかげんな本音を軽やかに言える幸せ！

不尽さを語ってさわやかなシーンは少ないのだが、たまにこういう人情場面を見せてくれる。放蕩息子の変身。臭いなあと苦笑いしながら、ホロリとさせられてしまう名場面である。

終幕は、ハルがフォールスタッフを追放する、これも世に名高きシーン（5幕5場）。ハルが即位すると知って駆けつけた悪友に、「おまえなど知らぬ」と。ロンドンから10マイル以内に近づくべからず。ハルが最後まで冷たいのではないかという批評はもちろんある。でも、日本の時代劇ならば、「江戸10里四方所払いを命ず」、「えっ、そんな寛大なお裁きでよろしいのですか」って一場だ。おまけに年金も出すとか。

ハルは若き日に共に浮かれ騒いだ悪友たちと別れ、非道な策略が多々待ちうけている、魑魅魍魎^{ち み もうりょう ばっこ}の跋扈する王宮へと戻っていく。これは誰にでも訪れる「青春の終わり」的一幕としても味わうことができる、すぐれて普遍的な物語である。

で、さて、昔話をひとつお許しいただきたい。学生時代、僕のシェイクスピア学の師匠がイギリスの現代文学を味読する読書会を開いていた¹⁰⁾。大学院生・学部生を中心とするその勉強会に、ひとりのお婆さんが参加していた。官庁勤めをしていたが、年金が出る年になったのですぐに退職、今は読書と年に1度の海外旅行が楽しみだという。謙虚で物腰穏やか、けれども一本筋が通っている。僕がいいかげんな訳し方をすると、「狩野さん、私はちょっと読み方が違うんですけど」と、何度か指摘された。若い学生たちと違って、文学作品を頭で読んでいない、自分の人生と足をからませながら、しかし正確に一字一句を吟味している風であった。

生涯独身だったとか。正直に申し上げると、僕には偏見があって、「ずっと独

10) 東大教授の日高八郎先生が、1970年代の後半から80年代にかけて、隔週の日曜日、青学会館で、「世界文学会」という学会の研究会として、一般人向けの読書会を開催していた。イギリスの文学作品を原文で一字一句味読する勉強会。僕はおよそ7年間参加したその読書会で、テキストの読み方、辞書の引き方をはじめ、それこそ基礎の基礎から、一生の文学研究の土台となるものを授けられた。心からの感謝を！

身の女性は、ちょいときついところがある」と。でも、このお婆さんには、教養があり、節度があり、人より前に出ず、しかし思ったことは率直に、誠実に、人を傷つけないように口にする。「私、お妾さんの子なの。日蔭者よ」とは、いつぞや読書会の後、食事をしていて、ポロリと語っていた話だった。

その読書会が閉会となって何年かがたち、僕は別の勉強会に彼女を誘った。今度は月に1冊ずつ翻訳でシェイクスピアを読んできて、わいわいと感想を言い合う社会人の会である。その日は『ヘンリー四世』がテキスト、参加者が口々に「フォールスタッフが面白い」と話す中で、彼女だけは「私、フォールスタッフは嫌い。無責任ですよ」と。きつい言い方とは無縁だと思っていた彼女にしては、ピシャリとした口調、僕にとっては強烈な一言だった。

彼女とはその後、音信がとだえていたが、ある日彼女の友人という女性から電話がかかってきて、一周忌の法要に出てほしいと言われた。天涯孤独の彼女は、その友人に看取られて、永眠していた。法事の席で聞かされた話は——お婆さんは若いころ、歌舞伎の若手役者と一緒に暮らしていた、でもそろそろ彼が売れてきた、彼女は足手まといになるといけないからと、身を引いたというのである。

そんな彼女が嫌ったフォールスタッフである。シェイクスピアの創造したフォールスタッフは、為政者を痛烈に揶揄し批判するが、同時に国家の安定と繁栄を願う立場に立てば、新王には当然切り捨てられるべきならず者である。『ヘンリー四世』は、政治の世界と民衆の世界、その両方の世界観なり価値観なりを絶妙のバランスで見せてくれる。上からの歴史と下からの歴史が交錯する重層構造の芝居。しかも、両者は単に並置されているだけでなく、お互いがお互いを諷刺し合う。その^{かなめ}要となっているのがフォールスタッフである。だから、彼は王侯貴族に外野の安全地帯から野次を飛ばす存在ではなく、自分も徹底的に批判される無責任男なのである。

頭ではわかっていた、そうしたフォールスタッフの立ち位置を、ストンと腹の底に落としてくれたのは、折り目正しい生き方を自らの内心の“名誉”としていた老婆の一言であった。

(2014年7月脱稿)